

「場」でわかる日本語

場の言語学への招待

An introduction to Linguistics of BA

東京学芸大学留学生センター教授

岡 智之

大阪外国語大学大学院博士後期課程言語社会専攻修了。博士（言語文化学）。日本語学校、韓国大学講師を経て、現在東京学芸大学留学生センター教授。専門は言語学。著書に『場所の言語学』ひつじ書房（2013）がある。

1 はじめに「場の空気を読む」とは？

KYという言葉がはやったことがある。KYとは、「空気が読めない」の略語であり、「あいつはKYだ」というと空気を読めない人を非難する言葉としてよく使われた。しかし、そもそも「空気を読む」とは何か説明できるだろうか。特に日本語を学ぶ外国人にとっては、理解しにくいものではないだろうか。空気は「場」と関係している。「場の空気」というように、空気は場を作り動かすものだ。その場にふさわしくない言葉を言ったり、ふるまいをしたとき、「空気が読めない」といわれるのだ。「場」には、「公の場」「私的な場」とか「上下関係のある（ない）場」、「今ここの場」「談話の場」「概念の場」など様々な場があり、どの言語社会でもこのような「場」は存在すると言えるが、日本語は特に「場」と密接にかかわっている言語であると言えるのではないか。例えば、日本語には、英語のように誰にでも使える「I」や「you」という人称代名詞がない。常に、「俺」なのか「僕」なのか「私」なのか、また「お前」なのか「君」なのか「先生」なのか、相手との関係がわからないと使えない言語なのである。一方で、二人が語り合っている場では、いちいち「私は」とか「あなたは」とかいう必要がない。空気や場を共有することで成り立っている言語といえるかもしれない。「場」の理解が、日本社会や日本語を理解するうえで、不可欠であり、日本語非母語話者も、「場」がわかれば、日本語がよりわかるようになると思われる。

2 「場」があるから「主語」はいらない

2.1 「私は暖かいですけど、あなたは暖かいですか？」

日本語では、いちいち「私は」とか「あなたは」というような人称代名詞を使わない。また、使う場合でも、相手との関係や場に応じてそれを使い分ける。また、「寒いね」とか「(バスが)来た！」のように、「主語」といわれるようなものを使っていない。「主語」を「誰が(何が)どうした(どんなだ)」の「誰が」「何が」に当たるものと簡単に理解しておく、まず少なくとも日本語では「誰が」どうしたということを一いちいち言っていないのである。日本語では、その場において、お互いに分かっているものについては言及しなくてもよい。むしろ言った方が不自然になる場合が多いのである。試しに次のような会話はだろうか。

(1) A:「今日、私は暖かいですけど、あなたは暖かいですか。桜が満開です。あなたはもう花見に行きましたか？」

B:「はい、私も暖かいです。私は昨日、京都に花見に行きました。」

日本語を勉強し始めた外国人留学生がこのような会話をするのは聞くかもしれないが、こんな会話を日本人同士ではまずしないだろう。たとえば、4月の初め頃、外で会った日本人は次のような会話をすることもできる。

(2) A:「今日はあったかいね。桜が満開だよ。花見行った？」

B:「そうだね。昨日行ってきたよ。」

この中で、唯一主語らしいものは「桜が満開だよ」の「桜が」くらいだろうか。「あったかい」の主語は、「今日は」だろうか。「何が」暖かいのだろうか。英語では、“It’s warm today”のように、「It」という主語を立てなければならない。また、英語では「I’m warm.」「Are you warm?」と言えるが、日本語で「私は暖かいです。」「あなたは暖かいですか」と、「私」「あなた」という言葉を使うと何か不自然に感じる。「暖かい」かどうかは、その場にいる人なら言われなくても感じていることであり、「私」がどうか、「あなた」がどうかの問題ではないのである。だから、「私」「あなた」を使う必要がない。また、他の言語のように「It」などの漠然とした状況や「天気」などを指す文法上の主語を立てる必要もないのである。その場にいる人ならだれでも感じている体感をそのまま言っているだけなのだ。特定の誰かが、何かが「暖かい」と言っているのではなく、その「場」が「暖かい」のであって、同時にそれを感じている「私」も「あなた」も暖かいわけである。(2)のようなお天気の会話を、日本人はまず会った最初の時に使うが、これは何か必要な情報をやり取りしているのではなく、二人が同じ場にいることを確認しあっているのだから、同じ場を共有して同じことを感じていることを確認して共感を生む発話なのだ。「ね」という終助詞も、お互いに共有情報を確認する働きに一役買っている。日本語において「暖かい」のは「今この場」であって、英語などのように文法上の「主語」を立てる必要がないのである。

また、(2) A:「花見行った？」では、「あなたは」という人称代名詞を使っていない。これは省略というより、目の前の人に話しているから「あなたは」という情報を使う必要がないのであり、「あなた」を使うと逆に失礼になってしまう。使うと不自然になるとすれば省略というのも正しくないだろう。使うとすれば「俺は行ったけど、お前は？」というように、対比的なニュアンスで使う場合だろうか。答えのB:「昨日行ってきたよ」でもいちいち「私は」を使っていないし、「花見に」という質問で使われている情報も使う必要はないのである。その場に二人がいて、話している場では、「私」「あ

なた」を使う必要がないのである。つまり、場があるから主語はいらないのである。

2.2 「私はどこですか？」

—「ここ」が大事か、「私」が大事か

初めて旅行した町で自分のいる場所がわからなくなった時、歩いている人にどう聞かだろうか？日本語では、「ここはどこですか？」と言えるだろう。これを英語にするとどうなるだろうか？「Where is here?」と答える人が多いと思われるが、「Where am I?」が正解である。逆に日本語で「私はどこですか？」というと不自然に感じられる。「え？あなたはそこにいるでしょ」と変な顔をされるかもしれない。日本語では、「ここ」という場所を問うているのに対し、英語では「私」のいる場所を問題にしているのだ。日本語は「私」より「ここ」という場所を問題にするということがわかる。英語では、自分は「今ここ」にいるのに、あたかも別な自分が外から「私」を見ている感じがする。日本語でも、すごろくのようなゲームで自分のコマの場所を聞いたり、地図上で自分の居場所を確認するときには、「私はどこですか」と言うかもしれない。その場合は、ゲームの中での自分の位置を外から見て確認しているわけである。町の観光案内図では、案内板が立っている場所は、「現在地」という表示が出ているが、英語では「You are here」となっている。ここでも、日本語は「今この場」を問題にしており、英語は「you」のいる場所を問題にしていることがわかる。日本語では、「私」は現れず、「今この場」が原点となりそれを語っている自分は「今この場」に内在して意識されない。それに対し、英語では常に「私」を主語としてそれを外から眺めるもう一人の自分が想定できる。「場」の観点からいえば、日本語は「場内在的」な観点をとり、英語は「場外在的」な観点をとることができるだろう。

2.3 「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた」—抜けたのは何か(誰か)

有名な川端康成の小説『雪国』の冒頭の文章は、日本語では(3)だが、英語の翻訳版では、(4)のように訳される。

(3) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。

- (4) The train came out of the long tunnel into the snow country.

英語では、「The train」という主語があり、日本語に逆翻訳すると「列車が長いトンネルから雪国に出てきた」という文になる。そうすると、列車の動きを焦点にしてそれをあたかも上空から眺めているような感じになる。一方、日本語では主語はない。「何が（誰が）」トンネルを抜けたのかは言っていない。それでも十分わかる立派な日本語である。ここでよく言われるのはこの文章は、この雪国という小説の主人公が列車に乗っていて、主人公が列車の中から見た景色（トンネルの中の真っ暗な様子と雪国の真っ白い景色）を描いているということだ。ただ、主人公がその列車に乗っているかどうかは、後の小説の展開でわかることであって、この冒頭の文だけでは、だれがそれを見ているかはわからない。もちろん主人公であってもいいし、小説を作った語り手でもいいし、またそれを読んでいる読み手でもいいわけである。大事なのは、トンネルを抜けた場所が「雪国だった」ということだ。大事なのはその場所の情景であって、それを見ている主体ではない。だから、日本語の文章は「主観的」というのは誤解を生むと思われる。場の言語学では、英語のような場の外からの描写を場外在的描写、日本語原文のような描写を場内在的描写と考える。

2.4 「富士山が見える」—場所としての「私」

留学生を連れたバス旅行で富士山（のふもと）に行くことがある。バスに乗っていると、突然、窓の左側に富士山が現れる。このとき、「富士山が見えるよ」といえる。（ただ、「ほら、富士山だよ」と指さすことも可能だが）。このとき「私は富士山が見える」と「私」を出すと不自然に聞こえる。英語では「I can see Mt.Fuji.」と「I」が出てくる。やはり、「私」が富士山を見ているという構図である。この時見ている「私」を主体といい、見られている「富士山」を対象、あるいは客体という。英語はほとんどこのような主体が客体（対象）を見るという「主客対立」の構図を持っていると言える。日本語ではだれが見ているのだろうか。「私が富士山が見える」という言い方はかなり不自然である。あえて「私」を表せば、「私には富士山が見える」というだろう。「私が見える」のではなく、「私に見える」のだ。一般に「が」は

主語や主体を標示すると言われるが、日本語では「が」ではなく「に」が使われていることに注目しよう。「に」は基本的に場所を指す（岡 2013）とすると、「私において」富士山が見えるのだ。この時の富士山は、「私の目（正確には網膜）に映っている」と同時に、「私の視界」に現れているとも言える。この時、「私」は何かを見ている主体というより、一種の「場所」であると考えられる。そして、「私」は言語的には普通現れないのだ。

「私」において現れるのは、視覚に限らず、「鐘の音が聞こえる」のような聴覚、「変なおいがする」などの嗅覚、「苦い味がする」などの味覚、「手が痛い」などの痛覚など、人間の五感や知覚すべてにかかわっている。「○○が」があらゆる事物はすべて、「私」の何らかの身体部分という場所（目、耳、鼻、舌、体の部分）に現れている現象ということが出来る。ここでは、英語のような主客対立の図式で、「私」という主体が感じている感覚というより、「私」という場所に現れている現象であると解釈することが出来る。

2.5 「が」は主語ではない

—「今この場」で一番目立つものを指す

一般に、「が」は「鳥が飛んでいる」のように主体、主語を標示すると言われるが、「富士山が見える」の「が」は、主体、主語ではなく、あえていえば、見えている「対象」といいようだろう。「が」自体は主語や動作主、主格を表すものでは必ずしもないわけである。では、いったい、「が」の正体は何だろうか。

「鳥が飛んでいる」も「富士山が見える」もよく考えれば、どちらも「鳥」や「富士山」を発見したときに、「あ、鳥だ!」「あ、富士山だ!」と叫んで指し示す動きは共通している。違いは「鳥」が動いているのに対し、「富士山」は静止していることである。すなわち、ここでの「が」の共通性とは、「今、この場」において、何か目立つものを発見したときに「あれ」とさす動きだということである。これは視覚に限定しているが、五感（聴覚、嗅覚、味覚、触覚）にも拡張される。また、感覚だけではなく、「故郷が懐かしい」「犬が怖い」などの情意の対象にも拡張される。情意は、「私」という人において起こることであることから、「が」が示すものは、「私」という場所において起こる情意をひきおこすもの（機縁）と言えるだろう。つまり、「が」の働きは、何らかの場

の中で起こっている出来事において最も目立つものを指し示すと言っていいだろう。

2.6 「は」は「場」である

一概念的場を設定する「は」

「が」の働きを説明したが、それとよく比較される「は」の働きは何だろうか。「は」も「が」も主語である、というような説明は、日本語学習者に混乱を生むだけである。「Taro is a student」は普通「太郎は学生である」と訳されるが、「太郎が学生である」とは言わないし、「が」と「は」は別の文脈で使われると考えるべきだろう。日本語では、「太郎ちゃんは？」と、「は」で切って文を作ることができる。「は」のあとには、「太郎ちゃん」をめぐって想起できるあらゆる事物が想定される。「太郎ちゃんは」―「いまここにいない」「病気で寝ている」「塾で勉強している」「小学校5年生である」など。そのような「太郎ちゃん」をめぐる場を設定するのが「は」の働きである。「は」も場なのだ。しかし、「今この場」ではなく、話し手が想起した概念的場であるところが違うところである。あたかも、漫画の吹き出しの枠の働きをするのが「は」なのだ。いわゆる主題を設定するというのがこの「は」の働きの一つである。

もうひとつ、「太郎は、コーヒーは好きですが、紅茶は嫌いです。」という文章での、「太郎は」は主題のはたらきをしていると考えられるが、「コーヒーは」の「は」は、一般には対比の働きと言われる。これを場という観点で考えると、太郎をめぐる場の中で、もう一つ「コーヒー」をめぐる場を設定することであり、それは同時に、コーヒー以外の場と切り分けることである。「コーヒーは好きです」というと、暗にそれ以外はこうだという対比のニュアンスを生む。それを明言すると「紅茶は嫌いです」という文が対比として出てくる。このように、「は」の場を設定するという働きから、主題や対比の意味が生まれてくるというわけである。

こうして、「は」が概念的場を設定するということからすれば、「が」との違いは明確である。「鳥が飛んでいる」での「鳥が」では、「今この場」で動いているもの自体を指し示しているのに対し、「鳥は飛んでいる」の「鳥は」では、「鳥」をめぐる概念の場を設定し、「鳥はどうか」というと、「飛んでいる」んだという回答を示していると考えられる。場の違いを考えれば「は」と「が」

の違いは明確になる。

また、「象は鼻が長い」のような文も、「は」と「が」の二つの主語がある（二重主語）と考える必要はない。これは「象」という場において、「鼻が長い」ということが成り立っていると考えればよいのだ。次章でも言うように、ここでは「場においてコトが成立する」という日本語で好まれるパターンが現れているのだ。

3 「場」においてコトがなる

3.1 「こちらハンバーグ定食になります」

一ナル表現を好む日本語

- (5) a. 私たち結婚することにしました。
b. 私たち結婚することになりました。

日本語では、「なる」を使った表現（以下、ナル表現と言う）がよく使われる。みんなの前で結婚の報告をする時に、「私たち結婚することにしました」というより、「私たち結婚することになりました」というほうが、自然な日本語表現に聞こえるようだ。「～しました」の方では、何か反対があったんだけど「あえてそうしたんだ」というニュアンスに受け取られかねない。「～になりました」の方では、特に反対もなく自然にそうなったという感じになる。ある留学生が、自分で決めたのになぜ「した」を使わないのか、「なった」では親とか他人に言われてそうさせられたように聞こえると質問したが、人によっては「なった」より、「した」の方が自然に聞こえることもあると思われる。このように一般に、主体の行為を重視するスル的な表現か、事柄の自然な成り行きを重視するナル的な表現か、どちらを好むかが言語によって異なることが多いと言える（池上 1981）。

よく「こちら、ハンバーグ定食になります」など、ファミリーレストランなどで使われる表現が間違いとされることがある。「～になる」を単なる変化と考えると、「じゃあ、なにがハンバーグ定食に変わるんだ」とつっこまれるかもしれないが、実は日常的に使われている普通の日本語である。「右手に見えるのは、国会議事堂になります」とか「トイレは、2階の奥になります」など「になる」は、別に変化を表すことなく使われている。この解釈はいろいろ考えられるが、「こちら、ハンバーグ定食です」と

断定するより、「こちらハンバーグ定食になります」と自然にそうなるような言い方で言うほうが、日本語では丁寧に感じられるのだ。これは、日本語の敬語にもはっきり表れている。「先生がお座りになった」というのは、先生が「お座り」という状態に変化したとはだれも考えていないわけで、この場合、「先生が座った」と、先生の行為に直接言及するより、「先生が座る」という行為が自然になったと表現している。日本語では、人の行為に直接言及せず、自然に成立したかのように遠回しに言うことが敬意を表す表現になるのだ。

3.2 「風で窓が開いた」か「風が窓を開けた」か

日本語では、「柿の木に実がなる」や「事がなった」のような、事物の成立を表すナル表現がある。「柿の木」という場所に、「実」という事物が「なる」という表現は、「場において何かがなる」という日本語でよく使われるパターンをよくあらわした表現と思われる。

次に、「風で窓が開いた」「風が窓を開けた」というペアを考えてみよう。「風が窓を開けた」は「太郎が窓を開けた」のように「風」を擬人化して、「窓を開ける」という行為をしたというスル的な表現である。一方、日本語では、「風で窓が開いた」という自動詞の表現、すなわち、自然に窓が開くという状態になったというナル的表現が好まれる。このとき「風で」は一般には原因とされるが、「で」は出来事が成立する場所を表す（岡2013）とすれば、「風の中で、窓が開いた」という場所的イメージとして解される。これは、「場においてコトがなる」という図式と合致する。

3.3 「鈴木さんは中国語を話すことができる」 —コトがデキルの文法

「できる」というのはもともと古語の「いでく」に由来し、「出て来る」ことである。「赤ちゃんができた」では、ある場所（人のお腹）に事物（赤ちゃん）が出て来る（発生する）ことであり、「ご飯ができた」では、（作った結果）今ここの場に「ご飯」が出現したということになる。

「鈴木さんは中国語を話すことができる」では、「中国語を話すこと」は事物というより事柄である。事柄が出て来るとはどういうことだろうか。これは、「鈴木さんにおいて、「鈴木さんが中国語を話す」（能力があり望めばいつでも）ことが出現する」という解釈から可能の意

味が出て来るのだと考えられる。可能の意味は、「ある場において、コトがでてくる」ことから生まれてくるのだ。

3.4 「猫にネズミが食べられる」の意味は？ —ラレル文は、場における事態の出来（しゅったい）を表す

学校の国語では、「れる・られる」を「受け身、可能、尊敬、自発」の助動詞と習う。同じ言葉がこのような4つの意味を表すとはどういうことだろうか。日本語を学ぶ外国人学生を悩ませるところである。

実は、この4つの意味は、「場における事態の出来（しゅったい）」という一つの意味から来ているのだ（尾上1998）。「出来（しゅったい）」というのは、聞きなれない言葉かと思われるが、もともと「出て来る」ということであり、「事件が起こったり、物事が出来上がることを意味する。「ごはんができた」も「鈴木さんは中国語を話すことができる」の「できる」の文は、そもそも出来を表す文と考えられる。

ラレル文の例として、「猫にネズミが食べられる」はいくつかの意味に解釈される。一つは、「猫にはネズミを食べることができる」能力があるという意味、すなわち可能の意味である。もう一つは、「猫がネズミを食べる」という能動文に対する「ネズミが猫に食べられる」という受け身の文としての解釈である。これは猫とネズミのどちらを「は」（概念的場）にするかで文の意味がはっきりしてくる。

(6) 猫（に）はネズミが食べられる（可能）

(7) ネズミは猫に食べられる（受け身）

ラレル文が、可能、受け身に解釈される原理はなんだろうか。尾上（1998）は、「ラレル形動詞述語によって実現される日本語本来の受け身文は、事態を個体の動きとして語らず、全体として発生、生起するものとして語る文である」（傍線稿者）、「受け身文とは、動作主の動作として捉えることができる事態をあえてそうしないで、主語を場としてある事態が発生、生起するというような捉え方をする文であり、その特別な捉え方の印として述語動詞がラレル形をとるものである」（傍線稿者）とし、ラレル文全体を「事態全体の出来（しゅったい）を語る文（出来文）」と規定している。この解釈を取る

ならば、(7)の受け身文は、「ネズミにおいて「猫がねずみを食べる」という事態が出来る」という解釈になる。一方、(6)の可能文は、「猫において「ネズミを食べる」という事態が、望めばいつでも出てくる」ということである。「ことが～できる」の文と同じ原理で、可能の意味が出てくる。

尾上が言うように、ラレル文は、「場において事態全体の出来・生起を語る文」＝出来文ということができる。ただ、尾上は、ナルそのものは、出来文には含めていない。しかし、ナルが、「一大事がなる」「結婚することになる」のように、事態の生起に使われていることを考えると、ナル文を出来文から除外することはないと思われる。また、尾上が可能動詞も出来文に含めており、そもそも「出来」は、「出てくる」という意味から来ていることを考えると、デキル文も出来文に含まれるだろう。このように、ナル的表現を、ナル、ラレル、デキルなどを含め、「場において、事態全体の出来・生起を語る文」として、位置づけることが可能である。このように日本語に特徴的なナル的表現の文法は、「場の言語学」の中に位置づけて考えることが肝要である。最後にこの「場の言語学」のパラダイムについて若干述べたいと思う。

4 おわりに一場の言語学への招待

これまでの主な言語学の考え方は、いずれも西洋近代科学、哲学の前提にある、「主客分離」、「個物と因果関係」のパラダイムに基づいている。それに対し、場の言語学は、「主客非分離」、「場における相互作用」のパラダイムに立っている。(清水 2003, 大塚 2013)

まず、「主客分離」とは、デカルトの「われ思う、故にわれあり」の哲学にのっとっている。つまり、まず主体である「私」を絶対的立場として、対象である客体を認識する立場であり、主観と客観を完全に分ける立場である。自己と他者を分ける自他分離もその一種である。また、「個物と因果関係」とは、ニュートン力学以来の近代科学の前提に立つものだ。たとえば、認知言語学では、球状の物体が次々とエネルギーを伝達していくというビリヤードボール・モデルを提唱し、この中から一区切りのエネルギー伝達の連鎖を取り出したものを「行為連鎖」(action chain)と呼んでいる。この認知モデルに基づいて「1つの物体が他の物体に接触することに

よって運動を引き起こし、その位置を変化させる」という他動的関係を典型的な事態としてみなしている。こういう考えは、モノである個体とその因果関係を中心に考える典型的な考え方である。

それに対し、場の言語学の「主客非分離」とは、主体と客体、主観と客観、自己と他者は本来非分離であるという立場である。そして、「場における相互作用」とは、近代のニュートン力学に対し、現代科学が打ち出した「場の量子論」の立場に立つものだ。すなわち、個々の物質がまず存在して、それが他の物質に影響を与えていくという立場ではなく、すべては場における相互作用によって成り立っているという立場である。言い換えれば、個体の働きは場のはたらきによって規定されているとも言える。物理学の世界だけではなく、複雑系である世界はすべて場における相互作用によって成り立っている。複雑系としての言語構造、言語使用の解明には、場の観点が必要なのだ。

場の言語学は、言語学だけではなく、近代的なパラダイムを根底的に転換する普遍的なパラダイムを提案している。その根幹として、主体によって忘れられた場所を復権し、主体と場所の統一を進めていくこと、そして、それをもって近代社会の根本的な問題解決へとつなげるという目標がある。言語学の立場からその一端を担っていくことが「場の言語学」を提唱する私達の課題である。

筆者は産業日本語や機械翻訳の専門家でも実務家でもないで、その問題にどう答えればいいのかわからないが、わかりやすい日本語や機械翻訳などを考えていくうえで、場の情報をいかに取り入れていくかということも課題となってくるだろう。このことについては、情報処理専門の方々に今後知恵を絞っていただきたいと考えている。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
 大塚正之 (2013) 『場所の哲学—近代法思想の限界を超えて—』晃洋書房
 岡 智之 (2013) 『場所の言語学』ひつじ書房
 尾上圭介 (1998) 「文法を考える 5 出来文 (1)」『日本語学』17 (7) :76-83, 明治書院
 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』講談社
 清水 博 (2003) 『場の思想』東京大学出版会